携帯電話の精

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
携帯電話の精

【Ｎコード】
Ｎ５７９９Ｍ

【作者名】
峰春秋人

【あらすじ】
携帯電話。
あなたは何年で買い変えますか？
携帯にだって心はありますか？

（前書き）

携帯電話買いました

僕は携帯電話に住んでる精。
名前は愛侍(あいじ)。名字はない。
持ち主は聡(さとる)。高校一年生のサッカー少年だ。
色はブルーで機種はドコモ。スライド式の画質バッチリの奴。
聡はいつも僕を持ち歩いている。
けど、学校には持っていかない。
なぜなら僕が見つかったその日に聡は退学処分を受けてしまう。
そうすると僕まで命を失ってしまう。
僕自身で動くことができないからどうしていいのかわからない。
まぁ、聡は偉いから僕を持っていくことはない。
実際今まで持っていったことはないから。
今日も朝早起きの聡を起こしてやり僕はすぐに仕事に取り掛かる。
まず、未解読のメール確認。そして電話履歴。終わったら休めるけど。

たまに聡のいない間に携帯の中(いえ)をいじるときがある。
着信履歴をあさったり、メールボックスをあさったりといろいろだけど。
着信履歴を漁ってるときによく顔と名前が一致しない人が出てくる。
聡が名前を覚えてない人は僕も覚えていない。

「えーと・・・あなたはどちら様ですか？」

たまにこうやって声をかけてみてはその人が誰なのか解明していく。

「私は小学校の時の彼女です。」

無表情ではないけどちょっと無表情に近い顔でみんなは答えてくれる。
メールボックスは一日の箱があってそれを開けてみるとすべてのメールが入ってる。
削除されたメールも意外に残ってたりする。
一番僕が困るのは聡が僕をベットに放り投げて置くこと。
そうすると飼い犬のフレンチの「山田さん」に襲われてしまう。
山田さんは1歳半って言うやんちゃな年齢で取っても困る。
僕をなめまわしてベッドから落として・・・おかげで僕の部屋はめちゃくちゃ。
メールボックスも直さなきゃいけないし・・・。

ある日。
僕は下水口に落とされた。
自分の家に水が浸水してきてもう僕は・・・死んでしまうのかと実感した。
聡だって僕を助けることをあきらめてるし。
もうこれで僕の人生は終わりなんだ。
サヨナラ。聡・・・。

「母さん。携帯治せないかな?」
「多分治せるわよ。」
あれ?僕生きてるのかな?
記憶にないや。
「しばらく修理に出すわよ。」

「うん。悪いな携帯。」

聡？

まさか・・・僕を助けてくれたんだ。

よかった・・・死ななかった。

また聡の携帯として生きていけるんだね？

よかった。

「本当によかったよ。下水口の掃除してるオジサンが拾ってくれてさー。あ！そういえばあの人僕のこと知ってたけど・・・どこで会ったんだっけなー。」

「なんて人？」

「谷西（たにに）さん。」

「あら！谷西さんって近所に住んでた優しいおじさんよ。」

「ああ。あの人かー。そういえばこの携帯もあの人がくれたんだよね。」

そうだったのか。

有難う。谷西さん。

こうして僕の人生は続いた。

聡は本当に僕を大切にしてくれた。

けど、長く続きはしなかった。

「母さん。携帯買い変えようよ。」

その言葉が僕の家の中で響いた。

これは聡が高校3年生の寒い冬の日だった。

「んーそうね。もう3年も使ってるしね。」

「そうだよ。」

「じゃ、あさって買いに行きましょう。」

そういって聡のお母さんが笑う。
僕がついに聡から離れる日が来たんだ。
いつか来るとはわかっていたけど・・・やっぱり離れたくないよ。
僕の鳴き声なんて聡には聞こえない。
なすすべなく予定の日になった。僕の・・・命日。

「新機種にしようっと。」

ルンルン気分の聡のポケットの中で僕は泣いていた。
聡のポケットのぬくもりはこれで終わるから。
悲しくて悲しくて。
いつどんな時だって一緒だったのに・・・もう別れちゃうなんて。

「はい。お預かりします。」

携帯ショップのお姉さんが僕を丁重に受け取る。
その時、

「ブーブー。」

僕が揺れた。
手の中でその感触を感じてお姉さんは僕を聡に再度渡す。
僕を開いて聡は目を丸くさせる。

「聡。今までありがとうね。
　　愛侍より」

知らない名前。けど、聡はびっくりしていた。

「愛侍・・・。」
「え？」
「いえ・・・。僕が昔つけた携帯の名前なんですよ。」
笑いながら聡は僕を握りしめた。
サヨナラ。聡。今度こそ本当にね。

「よろしいでしょうか？」
「はい。よろしくお願いします。」

僕はがスクラップ機に取りつけられる。
そしてそのレバーにお姉さんが手をかける。
サヨナラサヨナラ！
ギュッと目をつぶった。

「メキッ。」

体がきしむ。ドンドン壊れて行く。
痛い。けど、もう幸せだから。
サヨナラ。

「聡。」

最後につぶやいた。
目の前が暗くなった。
もう僕のデータはない。
ボクハシンダ。サヨナラ。サトル。

「ママ。この携帯がいいよ！」
「わかったわ。すいません。」

新しいご主人が僕を開けたり閉じたりといじくりまわす。
こんにちは。新しいご主人。

「パパ！見てみて新しい携帯だよ。」
「よかったな。ん？」
「どうしたの？あなた。」

新しいご主人のお父さんが僕をまじまじと見つめる。

「これ・・・僕が高校の時に持ってた機種と一緒だ。」
「へぇー。奇遇ね。」
「俺さー携帯に名前つけてたんだ。」
「なんて名前？」

ご主人がきく。
そして、ご主人のお父さんが口を開いた。

「愛侍。」

僕の頭の中で消えたと思っていた聡との思い出がよみがえった。
いつも一緒だった。春夏秋冬、古今東西。

「携帯電話は大切にしろよ。中に携帯の精がいるんだからな。」
「うん！わかった。よろしくね。愛侍。」

もう一度その名前で呼ばれるなんて思ってもいなかった。

ありがとう。聡。

「ありがとう。愛侍。」

そう小さく聡がつぶやいたのに気づいた。
僕は携帯の中で号泣した。

携帯には妖精がいてそいつらはご主人が大好きで死ぬ時は悲しむ。
ご主人はもう覚えてなんかくれない。
けど、携帯の精はちゃんとあなたとの思い出を大切に覚えているでしょう。

（後書き）

僕の携帯は一生大切にしたいな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5799m/

携帯電話の精

2011年10月7日10時36分発行